

ナフダトゥル・ウラマーの「中央」と「地方」 （インドネシア出張報告）

小林寧子

期間：2011年3月3日～9日，15日～17日

今回の研究出張は、国内最大のイスラーム団体ナフダトゥル・ウラマーの全国大会後の情勢を調べることを目的とした。昨年やはりセンターの支援による出張でナフダトゥル・ウラマー全国大会を見学したが、そこで浮上した問題を、地方の指導者がどのように受けとめているかを知りたかった。東部ジャワの州都スラバヤと、さらにそこから車で6時間かけて地方拠点のひとつであるジュンブルを訪問した。

昨年の全国大会では、指導部選挙（最高職の総裁、および組織運営の実務責任者の議長を選出）が、かつてない熱気を帯びて実施された。議長選は地方首長選挙なみのキャンペーンが行われたが、緊張を生み出したのは総裁選の方であった。外部勢力を巻き込んだロビー活動、メディアを利用した意見表明、マネー・ポリテクストと、過剰な宣伝戦に「モラルの失墜」を嘆く声が相次いだ。選挙の結果は、ウラマー（イスラーム学者）として尊敬を集める現総裁サハル・マフッズが、政治志向でマネージメント能力に長けたハシム・ムザディ（サハルの下で議長を務めた）を破り、再選された。議長選では、やはりウラマータイプで、精力的に宗教講話活動を積み上げてきた一世代若いサイド・アキル・シラジが当選した。その後の新中央役員会編成では、敗北した陣営には僅かなポジションしか配分されず、総裁・議長宛に抗議文が提出されるほどの不満が表明された。

指導部選挙で考慮すべきことは、州支部（全国33）も一票、県支部（全国450強）も同じ一票を投じるということである。通常、州支部が各県支部との意見調整を行うと考えられてきた。また、全国の中でもナフダトゥル・ウラマー発祥地の東部ジャワは最大の地盤であり、東部ジャワ州支部執行部が他州支部をリードするような構図があった。今回の指導部選挙の事情をそれぞれの陣営から、中央と地方でナフダトゥル・ウラマー活動家にインタビューした。

今回の調査でわかったのは、選挙では東部ジャワ州支部の発言力が低下したこと、しかも東部ジャワ州内部でも州支部と各県支部は意見が一致していなかったこと、である。また、強く印象付けられたのは、県支部レベルでは、中央の指導者が地方の状況を視察に来ない、あるいは地方の指導者の声を聞こうとしないことに対する不満が渦巻いていることであった。

ハシム・ムザディは確かにマネージメント能力に優れるが、州支部レベルの指導者

とは顔つなぎをしても県支部には顔を出さない。しかも、自らは国政選挙で立候補したり、州知事選挙で特定の候補者に肩入れしたり、ナフダトゥル・ウラマーを政治の道具にした。こういう批判が多かった。他方、サハル・マフッズは農村住民の生活現場に拠点を置く伝統的なウラマーであり、その学問は海外の研究者からも評価されている。しかし、高齢のせいか通常自ら運営するイスラーム学校（プサントレンと呼ばれる）のある中部ジャワの農村にすることが多い。そのため、地方へ足を運ばないだけでなく、ハシム・ムザディの政治活動をとどめることもしなかったと批判された。しかし、「年長者であり、学問が高いこと」を尊重するのがナフダトゥル・ウラマーの守るべき「伝統」として、サハルが支持された。

ただし、両陣営ともウラマーの指導性の再建と組織整備を問題にしている点では一致する。権威あるウラマーが少なくなっていく昨今、集団指導で組織を支えていける体制を整えなければならないという認識は共有されている。一方、今回の指導部選挙には外部勢力（大統領側近、ゴルカル党幹部）の干渉と買収活動も大きく報じられた。インタビューをした人たちの中でも「金は返した」「私のところには来なかった」と語る人はあっても、「マネー・ポリティクス」があったことを否定した人はいなかった。

ナフダトゥル・ウラマーは1926年に、東部ジャワでプサントレンを主宰するウラマーを中心に結成され、非ウラマーの成員も加わった。独立後は独立政党として国政に参加し、支持大衆がそのまま組織化もされずに成員と考えられるようになった。その間に宗教問題だけでなく支持大衆の社会福祉問題に取り組むことが課題となった。政府によって他のイスラーム系政党と合併させられひとつの会派になったところで、宗教社会団体への回帰をはかったが、政治の頸木から抜け出せないで現在に至っているという構図も見えてくる。一方、指導部には入らないが、それぞれの地域社会で住民に影響力を有するウラマーたちの声を尊重するという「伝統」は、草の根のムスリムとジャカルタの中央役員会のコミュニケーションをまだ成り立たせている。

ナフダトゥル・ウラマーのような団体はインドネシアの民主主義構築の土台となる「市民社会」となっている。しかし、その組織整備と成員の社会福祉問題に対応できるプログラムを実施する道のりはまだ遠いようであった。